

風を読む暮らしから、 風を利用する暮らしへ

石狩市は、石狩湾に面し、北の大河・石狩川が流れていることから、古くから漁業が盛んなまちでした。自然を相手にする漁師さんたちにとって、天気を予測することは生活上の必須条件。風向きを読み、日和を見ることが習慣で、天候の変化を把握することは生死にかかわる問題でした。

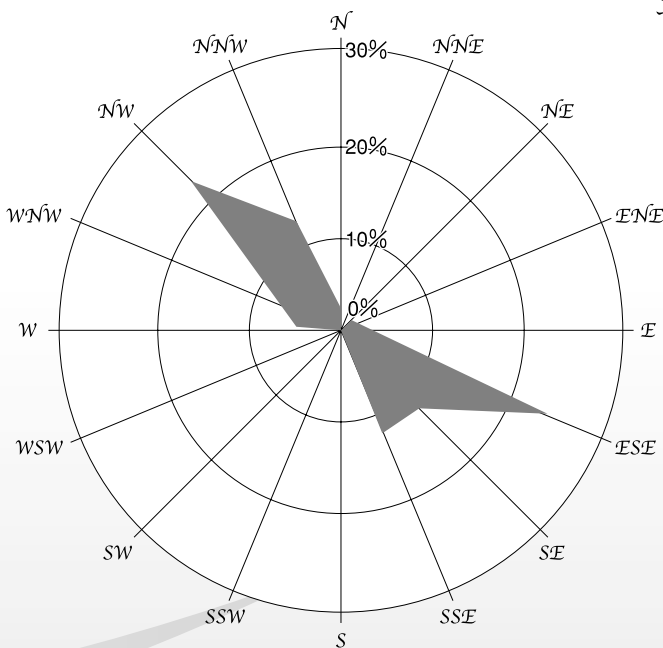
こうした理由から、風を識別するためにさまざまな名前が付けられたのです。

石狩の風は、大別すると「オキカゼ系」と「ヤマセ系」に分けられます。「オキカゼ系」とは、海から吹く風。反対に陸から海に吹く風が「ヤマセ系」です。「ヤマセ」は、時化（暴風雨で海が荒れること）や雨をもたらす風であり、冬から春にかけての強風は、ほとんどがこの「ヤマセ」です。ほかにも北西からの「タマカゼ」は吹雪、また「アイタバカゼ」は、大きなうねりのある風で、海難事故につながる恐ろしい風です。それに対し、「ダシカゼ」と呼ばれる風は、帆船が沖に出るちようど良い風を意味します。

このように風を読んで暮らした年月を経て、今、私たちは風を利用する暮らしを始めようとしています。風力発電の試みです。

石油や石炭など化石資源を利用する火力発電に対し、非化石エネルギーである風力発電は、資源となる風に限りがなければ、利用する際に大量の二酸化炭素を排出することもありません。

安全で、クリーン、そしてこれまでも人々を悩ましてきた強風をエネルギーに換えるという逆転の発想。"利風"の時代が、もうすぐそこまできています。



石狩の3～5月の風配図 (平成11年調べ)
風配図・別名ウインドローズは、風の向きを調べて、その頻度 (%表示) を放射状のグラフで表したものです。この図から、春は北西と東南東からの風が多いことがわかります。ちなみに「春一番」は、立春 (2月4日) から春分 (3月20日) の間に吹く、風速 8 m以上の南風 (東南東～西南西) のこと。

あなたはいくつ知っていますか? 石狩の風の名前

方角	風の名前	
北	子	アイノカゼ、シモカゼ、シモゲ
北東	牛寅	シモヤマセ 良門(者?)
東	卯	アラシ、ヤマセ、ダシカゼ
南東	辰巳	ヤマセ ダシカゼ、クダリ、ホンヤマセ
南	午	クダリヤマセ、クダリ、カミカゼ
南西	未申	ヒカタ ヒカタヤマセ、ホンヤマセ
西	酉	ニシ、ヒカタ、オキカゼ
北西	戌亥	オキカゼ系 タマカゼ ヒカタタマカゼ、タンバ、 寿都門(者?)、ニシタンバ、 アイタマカゼ

■石狩の自然・歴史・文化が分かる「石狩ファイル」

今回の特集では、「石狩ファイル」の「防風林」と「石狩の風の名前」から一部紹介させていただきました。

「石狩ファイル」とは、石狩の自然、歴史、文化などについて 1 テーマ 1 ページで解説するパンフレットで、石狩市ホームページでも配信するほか、いしかり砂丘の風資料館・市民図書館・市教育委員会 (市役所 4 階) で無料配布しています。興味のあるページだけ集めてファイルすれば、自分だけの「石狩事典」ができます! ぜひ、ご利用ください。



石狩に居を構えて20数年になる大島さんは、光・風・水をテーマに作品作りに取り組む木版画家・詩人として海外にも知られています。市民図書館の1階に飾られている大作「光・風・水の大地・・・いしかり」は、大島さんの作品です。

「エピソード」 目覚めと勇気をくれる風

大島龍さん（詩人・版画家 親船在住）

春がまだ遠い2月の朝、いつものように、目覚ましのコーヒーを片手に窓から海を眺める。

雪原の海岸線にぼつりとひとつ、黒い人影らしきものが見えた。「ああ、きつと黒田さん（*注）だろう」。

釣り人でもない限り、冬の朝にこの海岸線に立つ者は、私が彼女ぐらしいしかないからだ。「天気が穏やかなので海に出たのか。先を越されたな」。そう思っただけでいると、もう15分もその人影は動かない。やがて20分。「あつ」と、心の中で思わず叫んだ。その人影だと思っていたのは、オジロワシだったのだ。

この10年ほどの間に数回、同じ場所で見かけたオジロワシ。元旦の朝に見かけたこともあった。何だか旧友に会ったようで懐かしい。人もそうだが、鳥や動物の中にも、年を重ねることで風格や存在感が出てくる者がいる。吹き付ける海風にたじろぎもせず、じつと動かない姿に、自然の尊厳を垣間見た。疑わず、恐れず、同じ場所に在ることの意志。インスピレーションのままに在る、野生“のひらめき”。

人もまた、オジロワシのように、感性を失わずに年を重ねたい。

家の玄関を開けたとき、びゅうと横殴りに打つ強い風が好きだ。目覚めと勇気をもらったような気がするからだ。そんな風に私は、親愛と尊敬の情を込めて「お友達！」と、あいさつする。声を掛けると友情が生まれるからだ。友情は心地よければかりじゃない、時に厳しいことを言ってくれる、時には哀しい風が吹く。こうして心の中を、清々と風が吹き抜ける。

* * *

この地吹雪は2月いっぱい続く。3月には春嵐が来て、春の兆しと春風が何度か繰り返し返す石狩の春。「風の国だからこそ、待つことができ。待つことは勇気をもらうことですよ」と、大島さんは言う。

いままで痛く冷たかった風が、何と優しく吹き抜けて行くことか――。

*注 本文中の「黒田さん」は、ナチュラリスト・エッセイストの黒田晶子さん。